

幼稚園教育実習における現状と課題

～保育者としての動機付けと資質向上の視点から～

The current situations and problems in the kindergarten student teaching

～From a viewpoint of an incentive as the early childhood teacher and the advancement of quality～

國 光 みどり
Midori Kunimitsu

はじめに

学生の様々な育ちの経緯に関連しているといわれるメンタル・ヘルス面における弱さを資質として持つ今日の学生が、保育者になりたいという夢に向かって実践力と自信を持ち、複雑化した幼児教育現場に立ち向かう力を醸成することのできる教育実習のあり方とは如何なるものなのであろうか。

短期大学での2年間という短い養成期間の中で幼稚園での教育実習は、わずかに4週間という短期間しか与えられていない。保育士養成課程における保育実習を含めてもわずか2か月にすぎない。その中で保育者としての能力を開拓するには、いかにすればよいのだろうか。また、いま改めて問われている保育者の重要な資質を兼ね備えた保育者となるために確実な実践力を学生に身に付けさせるためには、教育実習をどのように捉え、明確な目的を構築し、それに向けていかなるパースペクティブを持って指導していけばよいのだろうか。

保育士養成協議会第48回研究大会(2009年、東北福祉大学)のなかで、「保育士養成におけるキー・コンピテンシー」、すなわち確かな実践力を如何にして醸成していくのか、というテーマのもとに様々な視点からの研究報告が行われた。コンピテンシーとは、「単なる知識や技能だけでなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力」であり、キー・コンピテンシーとは、そのようなコンピテンシー、つまりそれらの実践力等の向上を図り、その「個人の能力開発に十分な投資を行うことが社会経済の持続可能な発展と世界的な生活水準の向上にとって唯一の戦略」¹であるとされている。そこでここに提起された問題点を、以下にあげる4つの視点から考察してみたい。

常に時間とともに変化する保育現場においては、如何に的確な幼児理解を行い、それに伴った援助や配慮を行っていくことを可能とする実践力の必要性和豊かで柔軟な捉え方のできる人間性に基づく保育のセンスが要請されている。そのようなセンスを確実なものにするためには、今日の前に生き

る幼児と対峙しながら今この瞬間に何を育てなければならないのかを即座に見極め、必要な援助が可能な「幼児理解のセンス」向上の認識とその方法が先ず必要となるだろう。では、そのようなセンスをどのようにして獲得可能なものにできるのだろうか。これが第1の視点である。

また、前述したように幼児を取り巻く社会の複雑で多様な環境は、幼児そのものに加え、その保護者や周辺の大人社会の変化をももたらした。そのような中で、幼稚園・保育園に就職した学生は、その日から幼児の保護者との関係の構築と子育て支援に携わっていくことになるのである。そこで問題となるのは、「保護者を理解し寄り添っていくことのできる資質」、つまり保護者を支える力の確実な醸成である。年度初めの4月1日に「先生」と呼ばれる瞬間から、責任ある保育者としての実践が開始されるのである。短期大学の2年間で修了した時点においても、未だ20歳に満たない学生に対して、そのような厳しい現実を精神的にも肉体的にも明確に受け止めることができ、彼/彼女らの夢を潰すことなく困難を克服しうる逞しさが最も求められることになるのである。では、それをどのように教育していけばよいのであろうか。これが、第2の視点である。

第3の視点としては、実習を受ける幼稚園現場の問題があげられる。実際の現場にとっても大きな負担である実習生の受け入れは、現場に多様な労力を課すことになることは十分に理解しつつも、あえてその現場の負担を軽減し、実習生の将来的な現場での実践力の育成に配慮すると同時に、指導する立場にある現場の保育者自身の反省的姿勢と向上心の醸成に寄与できる実習の在り方が問われているのである。学生とともに成長することで教育者としての自らの立場を十分に理解し、保育者の一人一人のスキルアップに繋がる実習を構築しようという相乗的な効果を図ることはできないだろうか。筆者はかつて短期大学附属幼稚園に勤務経験があることから、学生に対して送り出す側と実習を受け入れる側双方の複雑な意識を体験的に認識している。それゆえに、送り手と受け入れ側の双方より建設的な教育実習プロセスのあり方とその方法を探求することも重要な課題となるであろう。

第4の視点としては、実習は幼児から学び、幼児のもつ旺盛なエネルギーを体感し、吸収できる実践的な機会である。そして、それらを支えていくのが養成校の教員の役割であり、保育現場の使命であると言える。日々の実習日誌を最大限活用しながら、短い実習期間を活かすにはどのような指導方法が適切なのだろうか。

以上のような視点にたつてよりよい実習の在り方を、学生が実際に体験した現場での行動を具体的に示す実習日誌を手がかりに考察してみたい。

1、本校の実習における現状。

近年、複雑で多様化した幼児教育事業を担っていく保育者養成は、いっそう高度な保育者としての資質レベルが要求されるようになってきており、養成校としてはその実践力の育成のために学生の実見を見据えながら試行錯誤を重ねている。本校は短期大学であるため、2年間という短い年月の中で幼稚園教諭二種免許と保育士資格を修得するために、学生にとってそれぞれの実習における時期や期間が最善であり、十分であるのかどうか、という問題が本校の実習委員会組織において毎年大きな課

題として議論されている。以下に、平成 21 年度における本学の実習実施表を示しておく。

【1 年次】

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
←—————→ ・教育実習 事前事後指導10回					←—————→ ・附属幼稚園教育実習 (半日実習・週1回/15回) ・教育実習事前事後指導 (5回) ・保育実習事前事後指導 (週1回/15回)					附属幼稚園教育実習 (全日:3日)、 保育実習Ⅰ施設 (2週間主に宿泊 実習)		

【2 年次】

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
←附属幼稚園教育実習 → (前期半日実習週1回/15回)			←保育実習ⅡまたはⅢ→ (7月下旬～8月下旬)			←————→ 附属幼稚園以外の幼稚園 (9月上旬～9月中旬2週間)		←————→ 教育実習事後指導 (9月下旬～7回)			
						←————→ 保育実習事後指導 (9月下旬～7回)					

1 年次後期に通常授業として附属幼稚園実習を 1 週間に 1 回の半日実習を 15 回と、2 月～3 月に同附属幼稚園において全日実習 3 日間を、保育実習Ⅰ施設で 2 週間の合間を縫いながら実施している。次に 2 年次の 7・8 月に保育実習をⅠ保育所(園)で 2 週間行い、引き続き、保育実習ⅡまたはⅢを選択した学生は、2 週間の実施が課せられている。その後 9 月前半に主として幼稚園教育実習附属以外の幼稚園において、2 週間の幼稚園実習を課している。これらの実習時期は、2 週間という短い期間で、なおかつ非常に込み入った実習期間で行われており、そのような設定自体が学生にとって有効で最善であるのか、筆者は若干の疑念を抱いている。毎年実習先の幼稚園や保育所・施設に依頼している実習アンケートを分析するとともに、実習先の園長、施設長と本学との懇談会で具体的に現場サイドの声を聞きながら問題点を浮き彫りにし、改善すべきは速やかに改善できるよう体制を整えてきてはいる。しかし、学生の傾向は毎年異なり、年度ごとにその時の学生の傾向に添った指導を的確に行っていくのは確かに困難を伴うものであり、アンケートに示された実習先からの要望や指摘に真摯に反省するとともに、改良すべき点等を反映させながら、実習に向けての事前指導において如何に有効な学びを行うか、を議論しているのが実情である。

2、教育実習事前事後指導のあり方について。

教育実習事前事後指導は 1 年次前期及び 2 年次後期 15 回にわたって展開されるものであり、附

属幼稚園実習に臨むために、1年次前期に10回実施されている。まだ高校生活から大学生活に肉体的にも精神的にも移行しきれていない学生に対し、保育業界における常識や身だしなみ、言葉づかい等現代の若者にとって憧れの職業とは全く別物とも思える不自由さや窮屈さを事前に指導しておくことは、極めて有効であり、2年間の養成機関の基礎として学んでおくべき必要不可欠な「保育者の資質」がここで醸成されるのである。

現場においては、もはや実習生としてではなく、幼児にとってはまさに「先生」であるということを実感しておくことは、実習の基本といっても過言ではないだろう。つまり、幼児の視点からみれば、その成長発達における「かけがえのない1日1日」を実習生とともに歩んでいるのであり、学生の実習期間も幼児たちは、自分の周囲にいる大人を「先生」という認識で生活をともにしているのである。その大人の一挙一動、さらに心持ちまでが無意識のうちに、幼児にインプリンティングされるという極めて危うい状況に彼ら実習生は置かれているのである。学生にとっては、単なる実習という言葉では容認されえない厳しさがそこには厳然と存在していることを自覚させ、幼児が成長発達する貴重な時間を共有しているという事実を認識することによって初めて、困難を克服して「先生」と呼ばれるに値するようになるのである。その意味で、幼児とともに時間を過ごす実習は、決して大学の授業の一齣として安易に経過するべきものではないのである。実習における成果は、机上で学んだ保育における原理や保育内容、保育技術とともに、学生一人一人の精神的な自律心があってこそ、その実践そのものが十分な学びに繋がるものなのである。

保育現場における実習に求められる精神的な自律心は、しかしながら一朝一夕にできるものではなく、教育実習事前指導において一歩ずつ、しかし確実に自らのものとしていかなければならないのである。1年次後期に控えている附属幼稚園実習を迎えるまでのプロセスには、「子どもが好きで遊ぶのが好きだから・・・」といった入学時に抱いていた学生の希望や夢は、まさに素朴であり純粋な意欲として尊重することは言うまでもないことであるが、それをより大きく成長させるためにも事前事後指導そして実践としての実習の意義を十分に指導しておく必要があるのである。

さて、平成21年度前期本学通学生1年生29名(履習生のうち85%の回収率)、2年生15名に対し、質問紙による学生の意識調査を実施した。「Q、幼児教育への道を選んだのはいつごろか」という質問に対して、中学校が30%、保育所・幼稚園の頃が27%、ついで高校が26%と続いている。次に「Q、幼児教育を選んだ動機について」では、中学校の「トライやる・ウィーク(1998年度から兵庫県において実施されている中学2年生対象で1週間行われる職場体験)」が28%、「自分が保育所・幼稚園に通っていた先生が好きだった」とする学生が20%、「親・先生・周りの人に勧められた」とする回答が20%という順になっている。これを見ると、中学校で実際に幼稚園・保育所に職業経験として実際に保育者の経験をする中で、乳幼児の可愛さや、面白さを実感できた事と指導を受けた先生の温かさに触れたことで、幼児教育の世界に興味を持ち続けてきたことが分かる。また、自分の幼児期において、幼稚園や保育所で実際出逢った先生が大好きだった、という体験を通じて芽生えてきた

先生への憧れを、その後の 10 数年間持ち続けてきたことが読み取れる。好意を寄せる先生と同じフィールドで働きたいという学生の願いは、視点を変えるとそれほどまでに初めて出逢った先生の存在やその影響力の大きさを示しているのである。それゆえ「初めて出逢う先生」として幼児にいかにか大きな影響力を与えるのかを意識し、学生自身が自らを常に反省しながら幼児の前に立つべきであり、それを引き出すような事前指導でなければならないのである。

そのような意味合いからも学生は精神的に高校生から大学生となり保育者としてのマインドを持ち、精神的自律を図っていかなければならない。それと並行して、幼児との生活において捉えるべき様々な気づきや幼児との関わり方、幼児理解とその文章表現の方法、さらには評価方法に至るまでの実習全容についての基本的要素を、学生は短い時間軸の中で習得していくのである。最善のアプローチで現場実習へ繋いでいく方法を、年々違った傾向にある学生の姿を見極めながら微妙な修正を行い、1 年次後期の附属幼稚園実習に送り出すのである。

それには実習担当のみならず、養成校教員それぞれの共通認識が不可欠であろう。なぜなら、各担当教科は、実習の十分な成果を導き出し、そのための道程を整備し、最終的に保育の専門家として就職に至るまでの基礎的あるいは総合的な、また実習と相互補完的な役割を担っているからである。そのために、教科担当者は、実習の意味や意義を十分に理解し、どの教科が実習のどのような部分と関連しているのかを認識理解することで、実習の知的背景を総合的に把握することが求められているのである。このような体系的で相補的な教科と実習との関連性は、実習それ自体についての深い共通理解と教員のチーム意識をさらに深めることに繋がり、まさに本学における FD（ファカルティ・ディベロップメント）の再構築に繋がっていくものとなる。

3、「幼児を理解する力」を実習で培う。

保育現場において現役の保育者の傾向として黒田は次のように述べている。

『最近の保育者は子どもに寄り添って、子どもを理解していく力が弱まっているのではないか』という話をよく聞きます。子どもにより添えない保育者、子どもを理解できない保育者が多くなっているようです。これには、さまざまな保育現場から見えてくる典型的な姿があります。たとえば、すぐ近くにいる子どもの顔が沈んでいても、全く気が付かなかったり、しきりに話しかけてくる子どもに答えようとせず、無視するような保育者の姿です。一人ひとりの子どもと保育者の関係性さえも保てなければ、これは今日的保育の課題の解決云々とさえ言えない状況です。』ⁱⁱ

それは幼児を理解する力の乏しい保育者が近年増加している傾向を的確に捉えた指摘であり、保育者としての資質の有無を疑いたくなる保育者に対する警告でもある。幼児と生の関わりが幼児を理解する最大の根拠であり、その場面における直感的な「気づき」のセンスによって瞬時の状況判断と幼児の内面理解を行い、「今ここで何を育てていくべきなのか」「何を経験させたいのか」を選択し、各幼児の気持ちに寄り添っていく能力が「幼児理解」なのである。現役の保育者でも、既述したように幼児を理解する力を改めて練り直す必要があるとすれば、保育実践の経験が乏しい実習生はどのように幼児

理解力を培うことができるのであろうか。

石井は、「保育者のスキルの多くは、就職してから身に付けるのだと考えている」¹¹¹ としながらも、「保育者を目指す学生たちに、就職前に保育者養成校で身に付けてほしいことは何か。その第一は自分が置かれている現状を把握し、そしてその現状を疑問に思うこと、『気付く目』である。・・・何でそうなんだろうと立ち止まる癖のある保育者はそこからの育ちが大きく違う。園長や先輩保育者が教えなくても、自らどんどん学んでいくことができる」¹¹²と述べ、保育者養成校在学時に意識しておくべき重大な実習目標のポイントを示唆している。つまり、学生は幼児との生活の中で、常にその場の状況や幼児の内なる心を見逃さず、瞬時に対応している教師の存在に意識を傾ける姿勢を保ちつつ実習するのである。その中で、次第に意識することなく自然に様々な気づきが自らのものとなった時に初めて、養成校で習得した成果が生きたものとなるのである。このようなプロセスを見通すことが先ずここで求められるのである。

また、ある幼児との関わり自体がその幼児の成長に影響を与えると考えれば、実習生個人の行動や表情、遣っている言葉等全てが注意深く配慮されねばならない。そのような姿勢に立つと、「もしかしたらこうかもしれない」といった「気づき」の瞬間が自然に認識できるようになるのである。これが、石井のいう、養成校において身に付けてほしい事の第2の視点である。つまり「物事を深く考えたり調べたりする」ことの重要さを、石井は指摘しているのである。「気付く目」が養われると、様々な場面で生じる状況に対して自分自身で調査し、時には園長や先輩保育者に助言を求めるという自発的な行為が生まれてくる。その経験の積み重ねが保育者としての自信や、自らの知識をゆるぎないものとして自分の経験知の裾野を広げていくことになる。幼児と常に接触できる機会をもたない学生には、視聴覚教材等を通じて生の幼児の生活そのものに触れ、記録しておく習慣づけをし、「立ち止まりの癖付け」を徹底することが先ずなされなければならない。次に「何が問題なのか、何に疑問を抱き立ち止まったのか」を文章化し、その問題点を省察する習慣を徹底的に実践させる段階が次にくる。また、「～かもしれない。」というフレーズを数多く文章として書き出すことも徹底しておく必要があるだろう。「A児はあの時こういった思いで悲しかったのかもしれない」、といった気づきが表現できるようになれば、次にその援助の方法がおのずと見つけられるようになるのである。「本当は〇〇したかったのね」と、A児の心に寄り添った言葉が見つかり、またその思いを言葉にすることで、周囲の友達にA児の思いを代弁することもできるのである。その援助によって他者の意識の違いを幼児たちは学びとるのである。保育者の繊細な気づきへの意識によって、幼児は大きく成長し、人間関係やささいな日常行動、例えば言葉遣いに至るまで、変化していくのである。それゆえに、可能な限り多くの保育現場の状況を、例えば、VTR等を見せながら問題点や具体的な改善点を教員と議論を交わしながら問題の所在を明確にしていくことが肝要である。その意味で、学生に課せられた観察記録は重要な役割を担っている。学生の観察力をその記録から読み取り、学生の意欲を削ぐことなく、適切なアドバイスを与え、学生にフィードバックすることは、指導教員にとって最も重要な役割である。

本学では、実際の幼児を観察する実践的観察を学生が行えるように、視聴覚資料を有効に使い、実際の保育現場での観察の中で「立ち止まり癖」を実践させている。

4、実践事例に基づき、幼児理解から援助・配慮の視点を見つける。

2009年5月下旬1年次、学生は附属幼稚園において9:00~10:30までの1時限に見学実習を行った。附属幼稚園では園内の行事として「端午の節句を祝う会」が開催される日であった。幼児は登園後、好きな遊び場で自由に遊んだ後、お祝いの会があるため通常より早く片づけを行い、各保育室において朝の会を行っていた。学生は廊下からその様子を観察し、その後遊戯室に移動し「端午の節句を祝う会」に集う全園児の姿を観察した。初めて附属幼稚園に足を踏み入れた日でもあり、緊張している様子であったが一人一人が真剣に観察していた。以下に、その時の学生の観察記録を示す。

朝の会の始まりの場面を見学して・・・

学生Aの観察記録

先生は自分の身の回りの事ができていない幼児を急がせるようなことはせずに、自分のペースで活動することができるようにしておられた。でも、手が止まってしまう進まなくなったら、早くできている友達の様子を知らせて自分で進められるように言葉がけをされていた。

学生Bの観察記録

歌を歌う時に幼児はみんな元気よく大きな声で歌っていた。それは教師学生Bの観察記録の楽しいピアノと幼児の方を向いて笑顔で明るく歌う姿に引き込まれていたように見えた。

学生Cの観察記録

みんなが歌を歌っている時に一人まだ着替え終わっていない幼児がいた。その幼児が着替え終わるまで他の幼児と歌いながら待つことによって、悲しい思いをしないために配慮されていたのかなと思った。

端午の節句を祝う会を見学して・・・

学生Dの観察記録

先生の説明には「えい！」や「やっ！」などと擬音を入れて幼児がする動作をつけて説明されていたのでとても分かりやすく、幼児もそれに答え返事をしていた。少し難しい話でも擬音を入れたり、質問をしたりすることによって、幼児達には楽しい話になり、自分の知っていることや経験したことを発表できる場になると感じた。

このように学生たちは、実際に体験した気づきを率直な文章で表現し考察することで、観察における感性をより豊かにし、多面的に分析できるように訓練を重ねることで、的確でより深い幼児理解による「教師の援助と配慮」への観点を見極めていくことにつながるのである。そこで、以下に幾つかの学生の記録の中から、援助・配慮に対する文章表現の例を示しておく。

学生Aの場合：

「着替えがゆっくりの幼児には早く着替えている幼児の姿を知らせるなどして、幼児自身の着替

えようとする意欲を援助し、自分の意志で行動できるようにする。」

学生Bの場合：

「歌を歌う時には幼児の顔を見ながら笑顔で話しかけるように歌うなど工夫し、幼児を楽しい歌の世界に誘うようにする。」

学生Cの場合：

「日本の伝統や文化を伝承するときには、擬音を使ったり、実際の生活にたとえたりし、幼児がイメージしやすくなるよう配慮しながら伝えていくとともに、幼児自身が経験した事を伝え合う楽しい場になるように導いていく。」

これらの例にみられるように、実習日誌における援助・配慮の観点を発見することの指導がここで必要とされるのである。これを踏まえ、1年次前期の教育実習事前事後指導において、このプロセスを辿りながら後期の附属幼稚園実習に入っていく。

5、幼児理解の力を保護者とのコミュニケーションする力へ移行する。

A女子大学の教員によると、4回生80名に授業の冒頭に「幼稚園と保育所・園ではどちらに就職したいと思うか」と質問したところ、学生の大半が保育所に挙手をしたという。幼稚園に行きたくない理由を尋ねると「一人で担任する自信が無い」「ピアノが苦手」等が挙がった。「かつては断然幼稚園への就職希望が上回っていたのにどうしてだろう」という疑問がその教員から投げかけられた。確かに、筆者もそのような今の学生事情を聞きながら不思議な感じを抱いた。都市部の私立幼稚園では、就職初年度から30人程度の幼児を一人で担任することも珍しくない。30人の幼児には60人の保護者の存在があり、さらに大勢の祖父母たちが一人の幼児の成長を固唾を飲んで見守っているのである。幼児の生活や育ちを保護者や祖父母の納得が得られるように保育者は語る必要がある。保育におけるコミュニケーション能力とは、家庭と保育現場を信頼関係で結ぶというという専門的な力が求められているということなのである。

一人で30人の幼児を担当するとなれば、4月1日から30組の保護者とコミュニケーションを図っていかなければならない。コミュニケーション能力の形成が懸念される現代の学生は、保育の実践に対し当然不安を抱いている。黒田は保育のコミュニケーション力を「保育者が保育の説明責任を果たせる言葉での表現力」であるとしている。さらに、「刻々と移り変わる一人一人の幼児の姿をすべて漏らさず伝えると言う事でもなく、美辞麗句を並べて表現すると言うことでもなく幼児の理解に立った、保育者の思いを込めた、幼児の場面を語れることだと思ふ¹⁾」と指摘している。

保育者には幼児理解の力が重要な専門性であり、養成校においてその能力の醸成を図ることが重要な課題であると前述したが、黒田の指摘から、幼児を理解する力をつける事そのものが保護者より良いコミュニケーションを構築する力に直結することがわかった。また、黒田は、幼児の様子を記録に取ることの重要性に言及し、

「幼児を観察的に真の姿を見ようとすることであり、同じ視点に立ち共感的に感じ取ることであり、

また、側面を見ながら分析的に確実な記録を執っていくことで幼児の園生活全般の姿や発達の過程がはっきり示されていく」^{vii}

と述べている。保育者はその記録に添って保護者とともに幼児の成長を喜び合い語り合うことができるのである。保育者が新任であっても、保護者との間に信頼関係が構築できれば、経験年数は決して大きな問題ではないだろう。そのためにも、学生の実習記録は、教育実習の中でまさに重要な意味を担っていると考えられるのである。

結び

保育の多様化に伴う保育者の専門性の問題が多く研修の場で語られている。精神的な粘り強さや忍耐力、幼児を理解する力、保護者とのコミュニケーション力、豊かな想像性等、保育を目指す学生には果てしないハードルが立ちだかっているといえる。幼児を理解する力が保護者との信頼の土台となりうることに言及し、その重要性を指摘した。しかし、実際に本校における附属幼稚園での30回の実習は、すべて半日実習であり、学生は幼児との昼食後、即座に大学に戻り、午後は通常の授業に出席する。附属幼稚園での保育は、その後2時半まで継続されるが、学生は1年間午前中の保育のみの経験しかできない状況である。本来なら、午後から降園時に至る幼児の生活やその後の保育者の仕事、担任教諭の思いを込めた翌日の保育準備の様子等、すべての過程を実習してこそ初めて幼稚園の実情を知ることができるのである。また、保育者と実習生との交流の中で、ルーティーン化した保育を保育者が再度反省的に捉え、改善していく契機が生まれる可能性を持つのである。

指導の計画についてもその日の実践と計画の齟齬を発見し修正する必要があること等、同じフィールドで保育に携わった者で無ければ学び合えないものがそこに存在し、実習生にその捉え方や手法を確実に指導するべきであろう。連続した全日実習で着実な基礎保育力を開拓した後、後半2週間の附属幼稚園以外の実習で実践力の養成を図るためのカリキュラム編成の必要性が求められる。

学生は教育実習によって「幼児の世界」の面白さを体感し、「保育者」という職業の素晴らしさを再確認する機会を得るのである。それと同時に保育の厳しさを学ぶ場であることも事実である。保育者は様々な専門性や保育の技術とともに、一人一人の幼児と向き合い、愛し愛おしむことのできる心を持たなければならない。そして、幼児教育に対し、強い意志と使命感を養成することを目標とすべきものなのである。

引用文献

- i 全国保育士養成協議会：「第48回開催案内」、2009年、2頁。
- ii 黒田秀樹：『今保育者に求められていること①子どもと親に寄り添う保育者の専門性』、『発達』118, Vol. 30 ミネルヴァ書房（京都）、2009年、10～11頁。
- iii 石井雅：「日本保育学会第62回大会発表論文集」、2009年、35頁。
- iv 石井雅：前掲書、35頁。
- v 黒田秀樹：『今保育者に求められていること①子どもと親に寄り添う保育者の専門性』、『発達』118, Vol. 30 ミネルヴァ書房（京都）、2009年、14頁。
- vi 黒田秀樹：前掲書、14頁。
- vii 黒田秀樹：前掲書、14頁。